

「異常事態、全域で同時多発」

下から突き上げるような直下型地震の激しい波は、活動中の救急隊員にも襲いかかった。

西宮市鳴尾消防署救急隊長の中村真一

(三)は公団武庫川団地から、けいれんを起こした一歳の女兒と母親を救急車に乗せ西四キロ離れた西宮回生病院を目指した。二十代の母親は心配そうに、赤ちゃんを見つめる。

団地から五百メートル走った。前方が白く光り、強い横揺れ。運転席の隊員和田亨明(三)がブレーキを踏み、路肩に停車した。パンクしたのかと思ったが、

まだ車体はガクガクと揺れている。後部席の隊員森口徹(三)が、母親と赤ちゃんに覆いかぶさるようにしてかばっていた。

無線機から雑音に混じり、「どうしたんや」「アカン」。慌ただしい声が、どなり声が飛び出してくる。中村が本部管制室に連絡したが、応答はない。

「どうしますか」。中村が母親に尋ねると、「ぜひ病院へ」。いたる所で道路が陥没。二・五キロ先の東長五郎橋に差し掛かったが、五十センチの段差で通行は不

可能。住民が駆け寄ってきた。「ガスのにおいがする。通報して下さい」

再び、無線のマイクを握った。つながった。しかし、管制室からは「管制機能果たせず。現場で対応を」。現場の情報は司令塔に上がらず、中央のコントロールが行われないまま救助組織は機能マヒに陥っていた。中村は「家で様子を見て下さい。熱が下がれば大丈夫」。昨春、救急救命士の資格を取った中村の言葉に母親は納得した。

母親と赤ちゃんをすぐ自宅に届けた。「署に戻ろう」。救急車を発進させようとしたが、動かない。液状化で道路の亀裂からあふれ出た泥水に前輪が埋まっていた。トラックにけん引してもらい、やっと脱出できた。

鳴尾消防署では、受付員一人が電話の応対に追われていた。当直明け九人と地震発生後に駆け付けた署員数人は三台の消防車に分乗し、出払っていた。中村らは黄色の防火衣とヘルメット、長靴を着用し、北二キロの甲子園一番町の家屋倒壊現場へ急行した。長い一日が始まった。

西宮警察署の地域課巡査辻本雅則(三)は窃盗事件の処理を終えて西宮北口西交番を出発。西宮市高松町の山手幹線を百二十五CCのバイクで巡回中だった。時速四十キロ、突然、バイクが蛇行。「あ、パ

ンクだ」。急停車。タイヤを確認しようとしたが、激しい横揺れ。急いで左端に寄せ、スタンドを立てようとすると、東の空が見たことのない青紫色。何だろうと思った瞬間、街灯やコンビニの電気が一瞬に消えた。

後ろを振り返ると、五十メートル先に大きな黒い塊があった。西行きの車のヘッドライトに照らされたのは、たった今、くぐったばかりの名神高速道路路上線の橋げただった。

ヘッドライトをつけた車が二台、高架道路から落ちて来た。

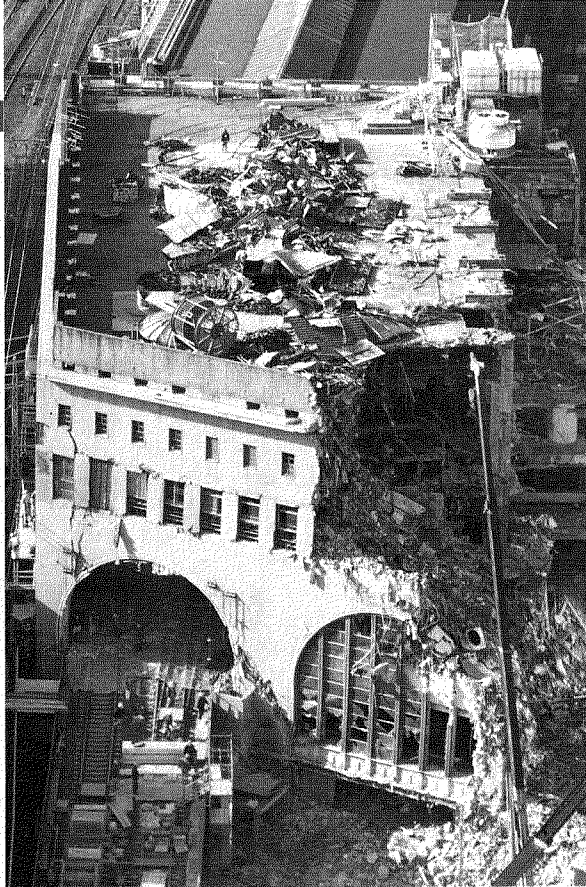
「至急、至急、西宮123から西宮。名神が落下。車も落ちた」。辻本は無線にどなった。

西宮123の呼び掛けは、署には十分届いていたが、受ける側はそれどころではなかった。当直の地域第二課長小川勝(五)は、一斉に鳴りだした無線機の緊急交信に耳を疑った。「家屋倒壊、住民生き埋めの模様」「道路崩落、車両横転しドライバー車内にあり」「ビルが傾き非常ベル鳴りやまず」

どれもが緊急連絡で、しかも応援を求めている。

小川は「全域で異常事態、同時多発中。応援要請にはこたえられず。各自、市民と協力して人命救助に全力を挙げよ」と指示すると、県警本部への専用線を取り上げた。

この時、何が起きているかを冷静に判断することなど、現場の消防、警察には、とうてい無理な状況だった。



阪急三宮駅ビル

三宮から阪急市街地へ向かう途中、阪急三宮駅ビルが倒壊した。写真は、倒壊したビルが、周囲の建物や道路に倒壊した様子。写真は、倒壊したビルが、周囲の建物や道路に倒壊した様子。